

<報告と資料>

ロシア・メディアの一断面

——エーハ・マスクヴィ, ノーヴァヤ・ガゼータ,
そしてグラスナスチ擁護財団——

鈴木 博 信

キーワード：ロシア，マス・メディア，言論の自由，編集権，
プーチン

[I]

プーチンのロシアは、2008年3月にプーチンの側近中の側近である弟分、若冠42歳のメドヴェージェフ第1副首相・「ガस्पロム」会長を大統領に当選させ、プーチンみずからは首相職につくという、「双頭体制」を採用して以来すでに1年半をこえた。

この間、国制上は上位についたメドヴェージェフ大統領がしだいに政治的野心をあらわにしたり、合衆国発の世界的経済危機にまきこまれたロシア経済のおちこみから、いわゆる「モノゴート」(英語にすると *monocity*。ソ連時代から単一の企業のみで成立ってきた企業城下町。構造改革がすすまないまま行詰っている。主なもので全土に400を数える)のいくつかでストライキをはじめとする深刻な社会不安が醸成されるなど、石油景気をしてこにして高成長を謳歌していたときにはかくされていた影の部分が、表面化してきた。とはいえ、政治的に決定的な比重をもつ首都モスクワでは「一都資本主義」(大津定美さんの命名)ともいべき消費ブームがつづいており、プーチン双頭体制にたいする支持もいまのところゆらいではない。

そうした国民の支持を調達してきた決定的なよりどころの1つが、プーチンが大統領に就任したときから築いてきたマス・メディア(とりわけ影響力の大きい放送メディア)にたいする徹底したコントロールであることは、よく知られている。具体的にいうと、すでに2005年現在でクレムリンから真に独立した報道をつづけているといい切れるのは、放送メディアではラジオ局「エーハ・マスクヴィ」(=「モスクワのこだま」)1局をのこすだけ、活字メディアでも、オランダ系資本による経済紙「ヴェーダマスチ」と英字紙「モスコウ・ニュース」とを別にすると、ロシア人の資本による全国紙では週刊新聞の「ノーヴァヤ・ガゼータ」紙1紙だけとなった。「ほかには、ロシア各地の地方紙のなかで30~40紙(発行部数はあわせて50万部程度にすぎない)が、クレムリンにたいして是々非々の立場に立つ

た報道をつづけているに止まる」(アレクセイ・シーモノフ「第4 権力の変容——メディアは国家の広報部門になった——」, 『独立新聞』, 2005年10月7日号。筆者のシーモノフ氏については、この報告のⅡ. を参照)。

なかでもテレビは、新興財閥のグシンスキー氏が創設したロシアではじめての民間「独立」テレビである NTV が、2001年春プーチン政権によって同氏から事実上奪いとられ、反骨精神にとんだキャスターと記者集団が追放されたのを分岐点にして、第1チャンネル (ORT), ラシーヤ (RTR), NTV の3大全国テレビ網を事実上一手におさめるといふ、クレムリンのテレビ支配が確立している。

エーハ・マスクヴィ

そうした放送界にあつて、上述したようにただ1局、真に独立したニュース報道と歯に衣させぬトーク番組で気を吐きつづけているラジオ局「エーハ・マスクヴィ」は、ゴルバチョフ時代の1990年(この年、言論・報道の自由を再生させる画期的な「マス・メディア法」が成立)にスタートした、「民間ラジオ局」第1号であり、30分毎のニュースをふくむ24時間放送の先鞭をつけるとともに、グシンスキー氏の持株会社「メディア・モスト」を大株主に迎え入れた。

しかし、グシンスキー氏の所有する全国テレビ NTV がプーチン政権に奪われたおなじ2001年、(ロシア第1の大企業でもある)世界最大の天然ガス生産会社にしてクレムリン企業そのものといつてよい「ガスプロム」がメディア支配のためにつくった子会社「ガスプロム・メディア」が、ここでもグシンスキー氏にとってかわり、同ラジオ局の株66%を入手して、筆頭株主となった。

以来、「エーハ・マスクヴィ」の所有者は、株の3分の2を制する「ガスプロム・メディア」社とのこりの34%、3分の1をもつ同局記者集団の2者となっているわけだが、9人から成る同ラジオ局の取締役会に「ガスプロム・メディア」社が直接おくりこんだ人物はいまのところ4人とど

まり、のこりは記者会の代表3人、株の所有とは直接かかわりのないその他の取締役2人という顔ぶれになっている。

同局の名物編集長アレクセイ・ヴェネディクトフ氏は、この構成を「いつでもそれなりの妥協をはかりうる構成だ」と評しているが（以下、2007年9月19日の談話。第5回日口学術・報道関係者会議に参加したメンバーで同氏にお会いした）、同編集長が記者集団の自主性を奔放なまでに尊重し独立不羈の編集方針を貫くことができているのは、取締役会の構成もさることながら、ここに紹介する「編集局定款」のなかに、編集長が記者集団の信望を失わないかぎり、編集長の座を守りつづける仕組みが埋め込まれているからに他ならない。

すなわち、つぎにしめす編集局「定款」が4.4.のa)～e)の5項目に分けて明記しているとおり、任命されるべき編集長の候補を決定するのは、あくまで記者会総会なのである。

- 4.4. 編集長は、編集局定款の以下にしめすa)～d)項の規定にしたがって、当社取締役会によって3年の任期で任命され、取締役会会長または取締役会が全権を委任した人物 [=社長] が会社を代表して編集長と取りかわす協定をふまえて活動する。
- a) 編集長の候補者は、合計して当社の3%を下らない株を持つ株主（ないし株主集団）、あるいは5人を下らない記者集団によって、記者会総会に提案される。
 - b) 記者会総会における議決権は、3か月以上編集局職員として勤務した記者が行使する。
 - c) 記者会総会は、議決権をもつ記者の4分の3以上の出席をもって有効に成立する。
 - d) 記者会総会の議決は、「1記者1票」の原則によって行われる。
 - e) 記者会総会に出席した記者の半数以上の支持をえた人物が、編集長候補として取締役会に提案される。

したがって、かりに筆頭株主の「ガスプロム・メディア」社が取締役会で絶対多数を制し、編集長を解任して意中の候補を立ててきても、記者会総会は、たとえば、みずからの信任する編集長を候補に決定するという形で多数派株主の決定をくつがえすことができる。つまり、何度取締役会側があらたな候補を立ててきても、これをくりかえし抑止しうる制度的保障を手にしているわけである。

ヴェネディクトフ編集長自身の表現を借りると、「わたしは2つの機関でえられます。まず記者会総会でえられて、つぎに株主も入っている取締役会で承認されるのです。核を発射するボタンを入れたスーツケースに、安全のため、ふたつのカギがついているようなものといえます。正式に選任されますと、任期は3年で、編集方針はわたしだけがひとりで決定できるのです」ということになる。

同編集長にわたしがはじめて会ったのは、2006年10月の第4回日口学術・報道者会議のメンバーが「エーハ・マスクヴィ」を訪問したときで、プーチン政権の、とくにチェチェン政策を真向うから批判しつづけてきた、上記「ノーヴァヤ・ガゼータ」紙の論説記者アンナ・ポリトコフスカヤ女史が非業の死をとげた直後のことだった。

ヴェネディクトフ編集長は、「プーチン氏はジャーナリストを、外国人記者をふくめ、権力者の道具としかみていません。ジャーナリズムが社会に欠くことのできない制度とはかんがえていないのです」と言い切るとともに、「プーチンの後継者はプーチンです。プーチン組には何人か息子がいますが、だれをえらんでもスタイルのちがいにすぎません」と予言していた(2006年10月19日の談話)。2008年春に後継大統領となったメドヴェージェフ氏はその予言どおりの人物だった。

「編集局定款」がどのような努力をつうじてかちとられ保持されてきたか、には別の物語が必要だが、「エーハ・マスクヴィ」の構造が、所有権・経営権にたいする編集権の独立を保障するうえで、きわめて示唆にとむ一方式であることはうたがいをいれない。

ノーヴァヤ・ガゼータ

筆者は、チェチェン戦争をめぐるプーチン政権の路線を「民族の虐殺」として糾弾しつづけてきた論説記者のアンナ・ポリトコフスカヤ女史が自宅のアパートで凶弾にたおれた直後の2006年10月16日に、はじめてノーヴァヤ・ガゼータ社を訪ねた。そのごも日ロ学術・報道者会議では2007年9月、2009年9月といわば定点観測よろしくこの自主・独立の報道をもって鳴る新聞社を訪問してきた。

女史の暗殺直後の'06年秋のさいはムラトフ編集長が当局に出向いている最中だったため、わたしたちが会えたのは副編集長のヤロシェフスキーさんだった。かれが、「こういうときこそ徹底した調査報道の手をゆるめるわけにはいかない——と申しあわせる若い記者たちをみていると、また犠牲者が出るのではないか、と気がかりでならない」「ただし、わたしたちは政府首脳部の汚職、組織犯罪、チェチェン市民への不正等々を正面切ってとりあげる、ロシアで唯一の新聞であるという路線に自己規制をくわえることはありません」と沈痛な面持ちで語っていたのをわすれることができない。

ちなみに、ポリトコフスカヤ女史がプーチン政権とロシア軍の非人道的行為をありのままに報道する一方、犠牲になった現地市民の救援にも力を惜しまなかった姿勢は、ジャーナリストの義務の範囲を超えているようにすらみえることがあったという。ほかの知識人や記者が沈黙していくなかで、女史はけっして記者活動をやめなかった。

チェチェン人の武装勢力が戦争の平和解決のための交渉開始を求めて'02年モスクワの劇場占拠事件をおこしたさいは、劇場内に入って交渉の仲介をこころみた。'04年の北オセチアの学校占拠事件のときも、仲裁のために現地に向った。（ところが、飛行機の中で出された飲みものを飲んで意識を失ってしまった。毒を盛られた、と女史は主張していた。）いずれの場合も、プーチン政権は武装勢力側の要求を黙殺して、大勢の市民が命を失う結果になった。それでも殺戮を止めようとした女史は、いまでも生



図1. 暗殺死・不審死をとげた6人の記者。
拡大写真はアンナ・ポリトコフスカヤ女史。

存者たちの尊敬をあつめている。

プーチン大統領は女史の暗殺事件の徹底捜査を約束してみせた。しかしながら結果は、直接の下手人とされた4人のうち逃走中のひとりのをのぞく3人の被告はことしはじめの裁判で、いずれも証拠不十分として無罪になるという「茶番劇」におわった。被告たちに女史暗殺を依頼した「発注者」についてはそのごもまったく捜査は行われていない。

'09年1月中旬には、女史を支援してきた人権派の弁護士のスタニスラフ・マルゲロフさんがモスクワで射殺されている。

'09年9月30日に2年ぶりに訪れたノーヴァヤ・ガゼータ紙では、女史の在りしの仕事ぶりを偲べるように女史の個室をそのまま保存した「ミニ博物館」が仕つらえられていた。そしておなじフロアにもうけられた応接室兼会見室のコーナーには、時の政権の不正や腐敗の深層を敢然として明るみに出す調査報道のゆえに命をおとした6人の記者の肖像写真が、社旗とともに掲げられていた。図1. でお示しした写真の右端はポリトコフスカヤ女史であるが、その左隣の男性は女史の先達ともいってよいシチェコーチヒン副編集長・下院議員だ。かれは国防省幹部から検事総長官房にまでおよぶ広汎な腐敗の実状を精力的に取材する一方、ロンドンに亡命し

ているチェチェン独立派政権のザカーエフ副大統領と接触してチェチェン戦争の話し合い解決の道をさぐるなど、渾身のはたらきをかさねてきたが、'03年にあきらかに暗殺とみられる中毒死をとげた人物である。

この間、ドミートリー・ムラトフ編集長は記者たちにくりかえし新聞社の閉鎖を提案してきたが、だれもイエスといわなかったという。政権側からは現在100件をこえる訴訟をおこされている由だ。

今回の訪問ではムラトフ編集長のほか、内政担当のリプスキー副編集長、調査報道専門記者のシュクルイリョフ、ピリノーヴァ両記者も顔をそろえて、プーチン、メドヴェージェフ双頭体制の実状をこもごも語ってくれた。1例だけあげると、10月11日に迫っていたモスクワ市議選の内実である。両記者がつぶさに語ってくれたところによると、プーチン与党である「統一ロシア」党とこれに係している党以外の野党候補は立候補資格審査の段階でありとあらゆる、事実無根の難くせをつけられて、ほんの数人をのこすだけでことごとく失格扱いにされたというのである。「不服があればどうぞ訴訟をおこして下さい」というのが市選管当局の言い分であるが、裁判が開かれるときには、選挙はとうのむかしに終わっているわけである。

ところで、ここでも確認できたのは、アンナさんらのジャーナリストとしての、また人権活動家としてのたぐいまれな勇気と行動を支えてきた重要な要素のひとつとして、同社独自の所有構造があった事実をみのがすわけにはいかない、ということだった。同社は、編集長のひきいる記者集団が株の過半数をもつ仕組みになっており、記者集団が最大の所有者であることによって編集権の独立を裏打ちしていたのである。

もともとノーヴァヤ・ガゼータは、生きのいいニュース新聞だったコムソモーリスヤ・プラウダがゴシップ中心の根っからの大衆紙に転換して生きのこりをはかったとき、これをよしとせぬ記者たちが同僚とたもとを分かち、外部の権力と金力から独立して社論を展開できる言論新聞たらんとして創刊した新聞である。そこでは、株の51%を記者集団が所有して、首脳人事や社の基本路線、増資・合併等の重要決定にたいして確固とした発

言権をもった社内の主権者となり、編集権の独立をはかってきた。その裏づけとなる51%の多数株は編集長が記者集団を代表して一手に行使する。重役会なり株主総会では、編集長がいわば51%を所有する「記者団」という独立の法人格にも似た‘ひとりの株主’として発言し行動するわけである。自分の所有する自社株を持ち寄ってプールしあうだけの従業員持株会などとは、そこが決定的にちがうといってよい。(のこり49パーセントの所有者構成——うち39パーセントは下院議員でプーチン与党の「統一ロシア」に属する人物が所有し、のこり10パーセントはあのゴルバチョフ元大統領がもっている——と記者集団・記者株との関係については、稿を改めてふれてみたい。)

[II]

シーモノフさんについて一言

以下にご紹介する資料は、第6回日ロ学術・報道者会議に参加したメンバーが2008年9月18日、グラスナスチ擁護財団〔英語名では GLASNOST' DEFENCE FOUNDATION. 以下 GDF とよぶ〕にアレクセイ・シーモノフ理事長を訪問したさいに、シーモノフ氏から頂戴した覚書を訳出したものである。

2007年にまとめられたこの覚書は、若干増補されて、ロシア・ジャーナリスト同盟の第8回大会によせて発行された「分析的報告——21世紀初頭のロシア・ジャーナリズム^{ポリーエ}展望」(モスクワ：ロシア・ジャーナリスト同盟，2008)⁽¹⁾と題する小冊子に収録されている。

上記した会議の2008年の訪露プログラムのなかに、GDF とモスクワ・ヘルシンキ・グループ (についてはここでふれる余裕はないが) という、いずれも「ロシアをより開かれた、闊達な社会にしたい」と志して活動している団体訪問の機会が設定されたおかげで、シーモノフさんをはじめとするユニークな「紳士・淑女」にお会いする機に恵まれた。シーモノフさ

んはモスクワ・ヘルシンキ・グループの一員でもある。

シーモノフさんは1939年8月生まれで現在70才。スターリンをいわばソビエト帝国のご神体の高みから一気に暴虐の独裁者皇帝へと引きおろしたスターリン批判によって、青春時代の価値観を根底からゆさぶられた「60年代のこどもたち」という点では、1933年生まれで6才年上のゴルバチョフ、エリツィン両氏と同世代といえる。

父親に、詩人から出発して第2次大戦での従軍記者体験にもとづく戦争文学「夜となく昼となく」などのベストセラーをものした国民的作家、コンスタンチン・シーモノフをもつ、いわばモスクワの知的貴族の御曹司のひとりである。みずからもすぐれた資質にめぐまれていただけに（小中高一貫の12年制の特別英語学校を銀メダルの優等生として卒業）、スターリン批判から人一倍ふかい衝撃をうけ、卒業後は心のよりどころをもとめてシベリアにおもむき2年間樵夫（きこり）として生活しながら、立つべき足場を模索した。

シベリアでのいくつかの出会いから悟るところのあったシーモノフ青年は、そこでモスクワ大学に入学してインドネシア語を専攻、ジャカルタで通訳生活を経験したあとの書きとなる。そして、しばらく文芸誌の編集者として活動したあと、映画づくりをライフワークにえらぶ。30才代のはじめにモスクワの映画大学を卒業して、ミュージカルやドキュメンタリー分野の映画作家として名をあげた。あわせて90年代に入ると、母校の教授や学部長として後進の育成にもあたりはじめた。

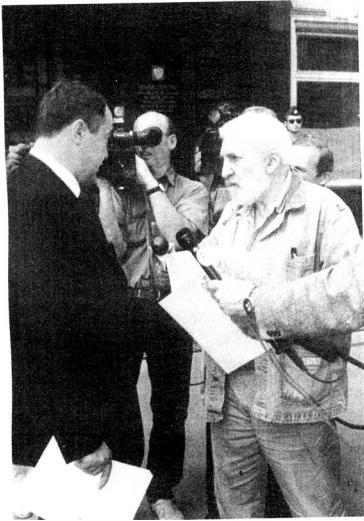
シーモノフ氏のあらたな転機が、91年をはじめに訪れる。永年にわたる公式のウソをふりおとしてソビエト国家を開かれた体制にしたい、と90年に画期的なマスコミ法を公布して、「グラスノスチ＝言論の自由」を再生させたゴルバチョフ体制ではあったが、91年1月、バルト諸国の独立をもとめて言論の自由と民族自立の主張を全面的に打ちだしたリトアニアの首都ヴィリニユスのテレビ・センターとこれを支持してあつまった多数の市民にたいし、ソ連 KGB（カーゲーベ）の特別部隊とソ連内務省の軍隊がおそいかり、多数の死傷者を出すソ連版「血の日曜日」がおきた。

(ゴルバチョフはのちに憲法裁判所で、これら軍隊の行動に事前に承認をあたえていたことをみとめた。) ラトヴィアのリガでも同様の血の弾圧がおきた。

これをみてシーモノフさんをはじめとする70人以上の映画監督、脚本家、俳優が立ちあがり、さしあたりテレビには一切顔を出さない、出演拒否をする、と申しあわせるとともに、事件の犠牲者の支援、とりわけ今後もありうる記者やジャーナリストにたいする弾圧のさいにのこされる遺族や遺児たちの生活を支えるためにも長つづきのする組織を設ける必要があると考えて、同年6月に正式に政府登録した財団が、GDFのはじまりである。

GDFは以来18年にわたって、言論の自由、プレスの自由、ジャーナリストの権利の擁護、活動中に生命をおとしたジャーナリストの遺族の支援等の活動をつづけてきたわけである。具体的には、ロシアのジャーナリスト自身に言論の自由・プレスの自由の認識をふかめてもらうためのセミナーや国内外でのシンポジウムなどをじっくりとつづけてきた。とりわけ特筆に値するのは、ロシア全土でのジャーナリストにたいする権利侵害事件の記録を徹底的にあつめてきたこと、つまり徹底的なモニタリング機関として機能してきたこと、そして侵害されたジャーナリストの権利を回復する方法としては、ロシア憲法やロシア・マスコミ法の規定をとことん利用・活用するという地味で骨の折れる「司法的」解決方式に粘りづよく徹してきた点である。そのため、少数ながら若い世代のマスコミ法の専門家を育成することにも力を入れている。

シーモノフさんにお会いした9月は、わずか5日でロシアの完勝におわった8月のグルジア＝ロシア戦争の直後だったことでもあり、この件にもふれたところ、同氏は、「グルジア大統領のサーカシヴィリのやったことにはむろん賛成できないが、きっかけはグルジア領である南オセチアの分離・独立をロシア側があおってきたことにある。ロシアの政策は昨日の政策であって未来がない。ダブル・スタンダードの理屈でことを正当化しているのだから、その意味では政策というよりデタラメといわざるをえない」といい切った。



Гласность — это чернаха,
ползущая к свободе слова.

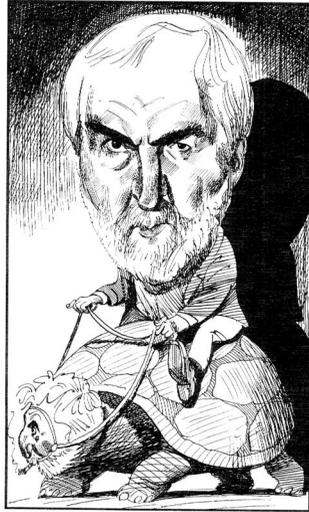


図2. グラスナスチ擁護財団理事長のアレクセイ・シーモノフさん

今回の訪露中にお会いしたロシアの識者たちが、野党共産党のジュガーノフ党首も含め、ニュアンスのちがいはあってもロシア政府支持の一角にぬりつぶされていたなかで、正面切ったロシア政府批判をしてのけたのは、シーモノフさんただ一人だった。

独立不羈の報道と論説をもって鳴るラジオ局「エーハ・マスクヴィ」のベネディクトフ編集長ですら、グルジア＝ロシア戦争にかんしては、独自の理由づけに立ちながらもはっきりとクレムリン支持を打ちだしていた旨、お伝えしたところ、返ってきたコメントはこうだった。「プーチン動物園の塀のなかに囲いこまれて生きのびている点では、かわりがないからだ。おなじ動物園でも、檻のなかに入っているメディアたちとちがって、放し飼いにしてもらっているメディアはいかにものびのびと自由にみえるというところがちがいいい」と。

言論の自由が再生した90年代のロシアのジャーナリズムは、世論調査をすると、国民の80パーセントが信頼を表明していたが、プーチン時代のこの8年間に信頼度は15パーセントにみたくないところまで低落した、とシー

モノフさんは言葉をついだ。——プーチン体制の強権支配が、メディアにたいするこのいちじるしい信頼度低下の大きな原因にはちがいない。(プーチン政府の人権委員会委員にも選ばれてプーチン氏とも接触することが多く、権力者としてのプーチン氏を熟知しているシーモノフさんは別なところでこうのべている。「わたしはかれの口から直接、2008年には引退して、庭いじりと花づくりをじっくりたのしみたい、と聞かされたことがある。花たちがこわがることだろうな、と草花に同情したものだ」と。)

——しかしながら、いまひとつのより大きな原因は、メディア自身のあり方によるところが大きい。プーチン時代になってから、権力ににらまれて職を失いたくないという、メディアの首脳からサラリーマン記者にいたるジャーナリストたち自身の「自己検閲」のひろがり、ことなかれ主義の横行がロシア・ジャーナリズムを急速に劣化させている。その点で、ジャーナリストの手本になる、真に権威のある、つまりジャーナリストとしての尊厳をなによりも大事にする大ジャーナリストの出現がどうしても必要だ。さいごにシーモノフさんは、そうつけ加えた。

シーモノフさんの親友のひとり、ゾーヤ・エロショークさんは、シーモノフさんのつぎのことばがわすれられない、と書きとめている。「いつだったか、かれは自分と自分の仲間たち、『60年代人間』について、こう語ってくれました。わたしたちが犯してきた失策は集団で犯したのです。ところが、透明に見とおすことは個人ですることなのです」(「ノーヴァヤ・エジェドニェーヴナヤ・ガゼータ」, 第1号, 1993年4月)

シーモノフさんは、ロシア中でどんな組織も手をつけていない、「ジャーナリストの権利侵害にかんする丹念なデータあつめ」とこれをもとにした法的な説得活動とたたかいをコツコツとつづけていくこと、これがわたしのノルマです、と別れぎわに語ってくれた。

そういえば、GDF のロゴマークは、ユーモラスに目を見開いて前進する亀ちゃんである。そこには「グラスナスチーそれは言論の自由にむかって這いつづける亀である」(Гласность — это черепаха, ползущая к своюде слова.) と添え書きされている。

資料

ジャーナリストにたいする犯罪下手人におとがめなし
 ——ロシア司法制度の低水準がもたらすもの——

«Безнаказанность преступлений против журналистов

— прямое следствие качества правопорядка и качества правосудия»

Автор: Алексей Кириллович Симонов, Перевод: Судзуки Хакусин

アレクセイ・シーモノフ（グラスナスチ擁護財団理事長）
 鈴木 博信・訳

ジャーナリストの権利を防衛するロシア内外の諸団体——国際団体としては CPJ (Committee to Protect Journalists 「ジャーナリスト保護委員会」), Reporters without Frontiers (「国境なき記者たち」), The Center For Extreme Reporting (「極限的報道センター」), The World Press Institute (「世界プレス協会」) などなど——の声明・報告・分類がたえるジャーナリストにたいする犯罪の数には、相当な食いちがいがある。なぜだろう？

説明のために、かりにつぎのような状況をかながえてみよう。A テレビ局の取材チームの1人が編集局から取材先へ急行するとちゅう、不運にも衝突事故にまきこまれて死亡する。事故はどこからともなく出現したトラックが引きおこした。ジャーナリストの死が職務に従事中に発生したことは明白とみえるが（そうでもなければ、なぜどこもしれぬ場所に向ってフル・スピードで急行するだろうか?）、状況が状況であるだけにかれの名は犯罪者の暴力の犠牲者となったジャーナリストの一覧表にはのらないかもしれない。だが、もろもろの疑問が湧いてくる。トラックの運転手の方は生命に別状なく衝突現場から走り去ったとすると、どういうことになる? そもそも取材チームはどこに向っていたのか——ビデオ撮影のための現場に向うところだったのか、それとも取材をおえて編集局へと帰るところだったのか? 取材がおわっていたのだとして——たぶんそうだろうが——取材内容は後刻 TV で放映されたのだろうか? 警察は逃走した

トラックの捜査をしたのだろうか？ 死亡した記者は上にあげた団体とどんな形であれかかわりがあったらうか？

これらの問いやその他もろもろの重要な問いに答えが出ていないなら、そうしたジャーナリストの名をリストにのせないでおく十分な根拠があるとはいい切れないだろう。そしてこれらの問いはすべて、捜査官のみが答えるところであるが、かれらはじつにしばしば沈黙をとかないのである。あるいは、世界中が知るところとなった、人気者のテレビ・アンカーマン、ヴラジスラフ・リスチエフの暗殺をみてみよう [1995年3月、自宅アパートの入口で2人組の男に射殺された]。かれの名は犠牲者のリストにのせられたし、ロシア中がその死を悼んだ。だが、かれの死はかれのジャーナリストとしての活動とはむすびつけられていないのである。かれは、ORTテレビ（「1チャンネル」）の時間帯のなかの広告への割当てを変えようとして消された。こうしたケースはどんな取りあつかいをすればよいのか？ 死亡統計は、きわめて注意ぶかく1例ずつ分析した作業の産物である。リスチエフを殺害した下手人はいまもみつけれられていない。[一部略]

ホワイト・ハウス砲撃事件、I・II次チェチェン戦争をめぐる

わたしたちは2006年10月にアンナ・ポリトフスカヤの死を追悼してある新聞 [ノーヴァヤ・ガゼータ] が出した特別号に、1992年から2006年までの15年間にロシアで命を失った、ジャーナリストをはじめとするメディアの働き手のリストを発表した。そこに上っている211人の名によって凡ての犠牲者がカバーされているとはとうていおもえないものの、このリストはわたしたちが同僚の生命をもって、何にたいし、どのように支払ってきたのか、について若干の結論を引き出すことは可能にしてくれる。

第1の、もっともむごたらしい死として分類できるのは、武力衝突にさいしておきた記者の死である。この15年にわたしたちは3つの大がかりな武力衝突を経験してきた。そのうち2つはまさに戦争とよぶに値する。最初の、'93年10月におきた武力衝突では5人のジャーナリストがオスタン

キノ・テレビ・センターの包囲網から銃撃をうけて殺害された。さらに2人の記者がセンターの内部と〔ロシア政府ビル、通称〕「ホワイト・ハウス」の近くで殺された。合計すると、'93年10月3日と4日の2日間で7人のジャーナリストが殺されたのである。

7人が死んださいの状況はかれらの同僚たち以外に調査したものはいない。同僚たちは捜査の結果わかった事実と記者たちのこうむったその他の犯罪のリスト——障害行為から撮影した写真フィルムやビデオ・カセットの没収にいたるもの——とを記者会見の場で当時の内相に手わたしたが、「おのおののケースについて注意ぶかくオープンに捜査する」とくりかえし内相が約束したにもかかわらず、このときわたされた調査結果やリストはあとかたもなく消えてしまった。

第2の武力衝突は、'94年11月から'96年8月まで2年近くつづいたチェチェン戦争である。政府側がたえず流す虚偽とにせ情報に面と向かって立つ勇気のあるロシア人記者たちが勇猛心と自由を愛する精神を誇りをもって発揮し、そのためにさらに高い代価を払うことになった。わたしたちの同僚20人が殺され、3人が行方不明のままとなっている。

この第1次チェチェン戦争はあきらかに内戦だった。双方は前線のないままに交戦し、記者たちは前線ぬきの双方の現場で取材にあたった。よく知られている事件は、ナターリア・アリャーキナ＝ムロゼク記者が、戦車に搭載した機関銃をぞんざいに扱った新兵に射たれて落命したもので、この事件は法廷までもちこまれた。もうひとつの、米国の女性写真記者、シンシア・エルバウチの事件は、所属不明の航空機から投下された爆弾によって彼女が爆死したにもかかわらず、なんらの調査も行われずじまいにおわっている。

この第1次チェチェン戦争中に死んだ記者たちの大多数についてわかっている唯一の事実は、かれらが「身許不明の人物によって殺害された」ということのみである。かれらはあわせて7人に達するが、下手人は一人としてつきとめられていないし、犠牲者はロシア人と外国人双方の活字メディアとテレビのジャーナリストをふくんでいるが、捜査機関による聞き

リング
取りすらまったく行われていない。

このように実行力のある法執行機関が不在であることをいいことにして、権力エリートは第2次チェチェン戦争の前夜、ジャーナリストの戦闘地域立入りを禁止し、ジャーナリストから独自に現場の状況を観察し記録する機会をうばった。それにかわって1999年10月、きびしい取材許可証制度を導入するとともに、一連のプレス・センターを設けて記者たちには政府の広報担当者がよしとする情報のみを配給する仕組みをスタートさせた。

この結果、第2次チェチェン戦争ではジャーナリストの死者が減った。再開された戦争の最初の、もっともはげしい戦闘が行われた局面で6人が死んだに止まった。ところが、憎しみという悪性腫瘍は、法的な治療をうけるにはますますほどとおい状況とあって、無数の、長期にわたる転移を引きおこし、いまに至るまで苦痛源の一つとなっている。2002年、独立派の戦士によって戦闘用ヘリコプターが撃墜された。乗組員や乗員とともに1人の記者が死んだ。2004年には、スタジアムで開かれた式典の席でチェチェン大統領にたいし爆薬をつかった暗殺テロが仕かけられ、アハマト・カドゥイロフ大統領（現大統領の父）とともに、記者一人が巻きぞえになって死んだ。この年の後半にテロリストが旅客機を吹きとばしたとき、同乗していた記者がこの種の3番目の犠牲者となった。

2006年10月7日におきたアンナ・ポリトコフスカヤ女史暗殺も、じっさいにはチェチェン戦争に根っこがあって、おこるべくしておこったものだった。チェチェンのふたつの戦争は宣戦布告なき戦争であり、そこではすべての概念が歪曲された。前線と銃後の別もなければ、「捕虜」が「人質」と呼ばれ、敵をひとり殺すと英雄的行為とみられる一方、土地をひとにぎり確保しても一時的な、しばしば無意味なこととうけとられるのである。

しかしながら、全体としてみると、これらのジャーナリストが失った生命は、「ホット・スポット」で何がおきているのか知る権利、にたいして人類が支払わねばならなかった代価とみなすことは可能である。

日常の取材活動中に

ところが、犠牲者の3分の2——140人以上のロシア人ジャーナリスト——は平時に、つまり法の支配が貫かれ法執行者が誠実に職務を果たすことによって生計をたてていく、と期待してよいときにおきているのである。市民としての、メディア共同体のメンバーとしてのわたしたちが、いかにして何ゆえにわたしたちの同僚が殺されたのか、だれがかれらの死にたいして責任を問われているのか、そうした悲劇はどこまでが犠牲者の職務活動と関係しており、かれらが文字なり語りなりテレビなりで報道したところどこまでかかわっているのか、を当然知る権利がある、と予期しているまさに平時におきているのである。不幸にも、この種の100をこえるケースについて、わたしたちは何ひとつ知らないし、今後何かがわかるとはまったくおもえないのである。

「まったく～ない」というのは陰気な暗黒のことばであって、そこには色合い・陰影・色どりの差などあるはずがないとおもわれるかもしれない。ところが、このことばにたっぷりつきあっていると、まっくら闇のなかにすら陰影を識別するようになるものである。そこにどんな陰影があるといいたいのか、説明させていただきたい。

例をあげよう。ORT（「1チャンネル」）の記者であるナターリヤ・アスターフィエヴァとセルゲイ・イワノフはハンティマンシイスクとチュメニの両市をむすぶ高速道路の165キロ地点で大型トラックと激突して死亡した。ウドムルト共和国のサラプール市からほどちかい地点の道路でもうひとつの交通事故がおきて、フィラート・ヴァレーイエフの命をうばった。陰影というのは、フィラートがバシコルトスタン共和国の事実上唯一の反対派新聞の編集長であり、衝突がおきたのはかれが発禁処分をうけた新聞の出来上がったばかりの原版をもって印刷所に急ぐ途中の出来事だった、という点にある。そんなわけで多くのものが、始末に困るジャーナリストを始末する便利な方法があったものよ、とうわさした。ところが、捜査の結果からは、この道路事故の原因を明らかにするなんらの光ももたらされ

なかった。そこで、1チャンネルの記者たちが解説報道をこころみるべく現場に向ったところで命をおとし、フィラートの方は、明白にジャーナリストとしての仕事をしていたとはどうみてもいえないとして、ひとりの私人として死んだ。おそらくわたしとしてはつぎのように説明すべきであろう。ロシア地方権力は自分の領内の印刷会社にたいし、自分らの好まない新聞を印刷することを禁じることができるらしい、と。フィラート・ヴァレーエフが自分の編集した新聞を印刷してもらうため、となりのウドムルト共和国にしよっちゅう急行していたのは、そこに理由がある。

道路上の衝突や航空機事故で死亡した16人のジャーナリストのうち、それなりに十分な捜査がおこなわれたケースは2例しかない。クラスノヤルスク地方のレベジ知事をのせたヘリコプターがあたらしいスキー場開きの会場へ向っていて墜落したさい、同乗していた3人の記者が知事とともに死亡したケースと、メディア企業持株会社「トップ・シークレット」のアルチョム・ボロヴィークが石油王のゼーヤ・バジャーエフの自家用機に同乗していて、離陸時に機が爆発——ないし分解——して命をおとしたケースである。この2例の捜査は徹底して長時間をかけて行われたが、結果は対立に火を注ぐものだった。政府委員会のコメントが、ジャーナリズム共同体が依頼した独立の調査マンのそれとは大きく食いちがっていたからである。公式の結論は、「いかなるテロ行為もなし。事故いがいのなにものでもなし」というもので、政府もこれを了承・是認したが、いまなお多くの人々が疑念をすてていない。

ありふれた事故にみえて

さて、つぎにもっとも広くひろがっていて、もっとも平凡な方法——キッチン・ナイフ、野球のバット、アイロン、ロープ等々を使用するもの——による殺しに目をうつそう。これは、ロシア全土でモスクワからウラジヴァストークにいたるまで、ハバロフスクからサンクト・ペテルブルクにいたるまでじつにひんぱんにおきている、「石づくりの階段から転落し

て死亡した」事故におとらず、ひんぱんにみられるところである。

この種の殺しの分析にとりかかると、同僚たちの死の原因をもとめてわたしたちが法執行機関の勤務員たち（つまり警察官や検事たち）に質問を浴びせたときに、かれらから返ってくる答えから構成した一般的なジャーナリスト像、その特徴を紹介しておきたい。

「ジャーナリストというのは、社会のもっとも恥じ知らずな部門を成している。かれらは飲みすぎるし、配偶者にうそをつきすぎる。かれらは肥大した自尊心のもち主であり、かつ性的異常におち入りやすい。ジャーナリストは政府の権威を無視し、みずからを最高権威とみなし、他から篡奪した権力を左にも右にも売りつけることをためらわない。かれらは反対派的心性をもっており、判断のしかたは断定的である。かれらはつねに社会的対立の現場に身をおくものの、対立点と対立しあう当事者とを分けて考える時間もチャンスももっていない。ジャーナリストは自分では尊厳といたがる傲慢さ、自分では往々にして職業的問題意識ということにしたがる不健全な好奇心、をその特質とする」

個々のジャーナリストにあてはめると、これらの特徴づけは一部は正当だしあたっていてもいる。わたしたちは天使ではない。

ジャーナリストが「家庭の」あらそいとよばれる場面で殺されるごとに、それが事故だったのか注文された殺人だったのか、という疑問がおきる。ほとんどの場合、この問いは答えられないままにおわる。答えがみつげられたというまれなケースもあるが、答えは例外なく、「事故であった」というものである。2000年に「ノーヴァヤ・ガゼータ」紙のイーゴリ・ドムニコフ記者が頭をハンマーで殴打されて殺されたときも、「事故」と判定された。じっさいにはこの事件の唯一の「偶発事故」的部分というのは、5年後におきた。おびただしい殺人を重ねてきた、タタルスタンに基地をおく犯罪グループを捜査していた当局が、偶然にイーゴリの書いた辛口の記事に名前をあげられた人間のひとりがイーゴリを殴れという注文を出し、引きうけた人間が注文を実行するさいに「熱が入りすぎて」悲劇を招いたことを知ったのである。じっさいに手を下した殺し屋、注文を出した人間、

さらには殺しを仲介した者まで、下手人はのこらず判明した。だが、犯罪の発注者はついに法廷によばれずに終わった。記者がナイフで刺殺されたり、頭蓋骨を割られたりして殺された合計30のケースの圧倒的多数は、ほんの形式的な捜査をただけで、「容疑者みつからず」というきまり文句で一件落着ということにされている。

名前だけでも二、三あげておこう。インターファックス通信のユーリイ・ソルティス記者、モスクワ、1994年6月殺害——下手人みつからず。ヤロスラフ・スヴィアルツェフ、マグニトゴルスク、1995年12月殺害——かれの死の背後にどんな理由ありやは不明、殺人者みつからず。ヴィクトル・ミハイロフ、チタ、1996年5月殺害——下手人みつからず。ヴィヤチェスラフ・ズヴォナリョフ、クルスク、1997年殺害——下手人みつからず。この悲しいリストは1年ごとに数人の名前がくわわって長くなっていく。

下手人がつきとめられ拘留され告訴された例を数えるには、五本の指で十分である。これらつきとめられた下手人は、ひとりとして犠牲者の職業活動とは関係がない点で共通している。アルタイ地方の悲劇でいうと、未成年のならずものが旅行先でテントを張ってねていたジャーナリストとその一家を惨殺し、ジャーナリストの中古車にガールフレンドたちをのせて一晩中走りまわっていた。ロシアの法執行者たちは、記者活動とかかわりのない殺人はつきとめやすいとみえる。じっさい、かれらにすれば道路上の偶発事件、ならずものとのたまたまの遭遇、飲んだあげくの口論としてすませることができるのである。もっとも、こんな事件ですら法執行者たちのコメントにはまちがいが散見される。[一部略]

小さな地方新聞「メシチェルスカヤ・ノーヴィ」の編集長であるレオニード・クズネツェフが2002年の夏、リヤザンで死んだ。捜査関係者によると、バイクから転落して岩で頭を打ったためという。弁護士と記者の2人からなるわたしたちの同僚が、編集長死去の現場であるカシーモフ市へ駆けつけた。編集長の死は、隣接する町にある印刷所で刷り上がったかれの独立紙の一部を携えて帰るとちゅうにおきたことだった。2人は、レオニードがバイクで走った高速道路1キロほどを丹念にしらべたが、岩や小石

のたぐいは一切目に入らなかった。そのかわり、近くの村で目撃者がひとりみつかった。レオニードの死んだ日、だれかがひき逃げされるのをみたというのである。だが、あらたな証言が出てきたというのに、法執行者たちは事件を見直そうともしなかった。

警察・検察の反応は

こうみえてくと、検事局——法の執行課程の実効性が確保されるよう監督することを任務とする機関——は、警察の恣意的行為や腰の重さには極力目をつぶることにしているとしかおもえなくなってくる。医師が殺されたとき、まず第1にチェックされるのは、かれの患者のだれかが犠牲者からなんらかの損害をうけていないか、そこから殺人がおきたのではないか、ということである。記者が死んだとき、なぜ同様の動機が考慮の対象にならないのか、謎というほかない。ジャーナリストがかれらの「患者」をやさしく、デリケートに扱うといったことは、なるほどまれにしかおこらないだろうし、じつのところ、ジャーナリストはそうにふるまうことを期待されてはいないわけだが、それにしても……といわねばならない。

つぎのカテゴリーは、火器の犠牲になる場合である。ジャーナリストは、モスクワでも沿海州でも、スモレンスクでもスヴェルドロフスク州でも、いたるところで射たれ殺されている。この数年におきたもっともよく知られる2つの例、すなわちポール・クレブニコフとアンナ・ポリトコフスカヤの暗殺もこのカテゴリーに入る。

ただしその前に、おどろくべきトリアッティ市（ヴォルガ川中流）の例をまずあげておきたい。同市では1995年～2003年にかけて6つのメディアの編集長が殺害された。同市の司法制度はとりわけ無力かつ無能とみえて、6件の殺人についてまだひとりの下手人もみつかっておらず、告発もされていない。まるでヴォルガ川に沿って荒々しい西部の一部が出現したかのようである。ここでは、わたし自身も知悉している2つのケースにふれておこう。

それは、おなじ新聞「トリアチンスコエ・アバズレーニエ」の編集長が18ヶ月のあいだに立てつづけに殺された事件であり、2002年4月にヴァレーリイ・イヴァノフ編集長が殺され、後任のアレクセイ・シードロフも2003年10月に殺害されたのである。この2つの殺人事件から浮かびあがるのは、法執行者の行動に共通するスタイル、そして共通して上層部に庇護してくれる水源をもっていることのふたつである。かれらの行動スタイルは、ロシア人にはよくしられたジョークをおもい出させる。「ロシアの法執行者に砂漠でライオンをつかまえる方法をたずねてみろ。かれはためらうところなく、きつこう答えるはずだ。——野ウサギをつかまえて、わたしがライオンです、といい出すまで殴ることだ、と」

上層部からの庇護といえば、上記のケースはどちらも検事総長第一代理のヴラジーミル・コレスニコフが采配をふるっていた。法執行者の「捜査活動まがい」をしてみせるさいのシナリオは、おなじもの1本やりだった。ジャーナリストが殺される。コレスニコフ氏がまもなくやってきて、殺人犯がみつかった、下手人はすでに逮捕された、と発表する。ヴァレーリイ・イヴァノフの場合は、3匹の「野ウサギ」がつかまり、アレクセイ・シードロフの場合はつかまった「野ウサギ」は1匹だった。しかるのち、ぴったりとシナリオに沿って逮捕されたものが犯行を自白し捜査官たちは公判にむけて書類を用意する。イヴァノフ殺しの場合は、公判はまったく開かれなかった。容疑者の1人はしずかに世を去り、のこりの2人は犯行にかかわったことが証明できないとして釈放された。シードロフ殺人の場合は、「犠牲の野ウサギ」役をふりあてられた溶接工のエヴゲーニイ・マイニンゲルにわたしたちの財団の弁護士がついて弁護にあたり、1年間の禁固のあと釈放をかちとった。検察側はかれが有罪であると法廷に信じさせることに失敗したのみか、かれがシードロフ殺しとなんらかのかかわりがあるということすら証明できずにおわったのである！ こんな屈辱的な無能ぶりだったというのに、その責任をとらされた検事は一人もいなかった。それと反対に、検事らは全員昇任しつづけている。そして、コレスニコフ氏も検事総長第1代理の座から法務次官の椅子へとうつついていった。

司法制度の質

わがロシアの法執行者たちの専門家としてのレベルと広い意味でのロシアの法制度全体の質について、この辺でふれておこう。

法的な観点からみてなんら通例から外れていない1ケースをとりあげる。1998年6月7日、「サヴェツカヤ・カルムイキア」紙の編集者をしていたラリーサ・ユーディナがカルムイキアの首都エリスタで手荒な殺され方をした。2日後下手人たちが逮捕され公判にかけられ有罪ときまった。だが、当初も現在も明白なことは、これらの被告にはこの女性編集者を殺害する動機がまったく見あたらないことだった。それが注文殺人であること、捜査官もふくめわたしたちはだれでもこの殺人を仕組んだのがどちらもイリウムジーノフというカルムイキアの大統領の仕業であると指名できること、は当時もいまもはっきりしている。この事件はイリウムジーノフ闊の牛耳るところとはなっていないとなり合った地方の捜査官が捜査にあたったものの、この犯罪の真の組織者たちの名は公式には発表されることなく終わった。

「わたしたちのところにも証言に立った人を保護する制度がありさえすれば！」とある捜査官はおもいあまったように語る。「そうなると、仕掛けた人間までとぎれることなく捜査をのばしていけるだろうに」と。

その種のもの役に立つ制度はロシアには存在しない。そこで、仕掛け人たちは依然として罰せられることもなくやっつけていけるのだ。

ドミートリイ・ホロドフ記者殺害事件 [1994年秋、グラチョフ国防相をはじめとする軍首脳汚職記事を「モスコーフスキー・コムソモーレッツ」紙で執筆中に爆殺された。容疑者として4人の降下部隊員をふくむ6人があがっている]の公判は、2度にわたって中止となった。捜査官が陪審員たちを説得するに足る証拠を提出できなかったためか、それとも陪審員たちが検事側の出してくる証拠をうけ入れないよう前もって説得されていたか、のどちらかだった。同様に、信じるに足る証拠がないという理由で陪審員のパネルは、ポール・フレブニコフ [「フォーブス」誌モスクワ支局長。ベレゾフ

スキーを中心にして新興財閥の実相を明かした著書「クレムリンのゴッドファーザー」で名をなす] 殺しの容疑者たちを信じるに足る証拠がないという口実で釈放してしまった。陪審裁判制がロシアにとり入れられてからこの方、証拠をあつめるうえで捜査官がいかに無力であるか、がおどろくほどあきらかになってきている。さらに、あらたな問題も浮上してきた。陪審員の合議の場とその評決が操作の対象になりかねない、という問題である。1995年3月1日に自宅近くで射ちころされたTVキャスターのヴラジスラフ・リスチエフのケースでは、いまにいたるまで1人の容疑者もみつかっておらず、1度も公判にかけられたことがない。

司法行政をあざ笑うようなもう1つの事例は、「クルガンスキエ・ヴェスチ」紙の行方不明になっている編集者ヴラジーミル・キルサーノフのケースである。世論の圧力によりかれにたいする搜索活動が数回にわたり反覆されたものの、かれのマイ・カーから血のしみがみつかっただけ、それ以上の進展は一切ないまま振り出しにもどっている。そして毎年5月17日、地元クルガンの記者たちがキルサーノフが殺されたと考えられているこの日を記念して例年、集会を開きピケを張ってきたのを、2007年からは法執行者たちが禁止してしまった。編集者殺害の下手人をつきとめるのに失敗した人たちは、自分たちの職業上の欠陥を市民の手でおもい出させられるのを好まないのである。

かれらが殺人か事故かのディレンマを解決するうえでどんなに頼り甲斐がなくどんなにプロらしくなくても、わが国の警察官と検察官を代行することはできないのだ。すくなくともわたしたちメディアに働くものがかれらの代行をすることはできない。わたしたちができる最善の作業はよい弁護士をよとえるだけの資金をあつめ、捜査官が任務から尻ごみしないように、また、法が決めた基準をやぶらないように、見張ることである。

捜査のプロセスをいつも見張っておきたいと熱望するわたしたちの財団は、2004年1月以来、ロシア連邦最高検察庁と定期的に情報交換をしてきた。2007年4月までの時期にわたしたちはジャーナリズムにたいする犯罪が238件あったと報告し、それぞれのケースにつき1件ごとに当局がどう

対応したかの情報を得てきた。

今日、わたしたちはロシアの法執行機関の効率性を統計的に評価するに足る具体的な情報をもっている。

2004～2006年、つまり上でふれたのと同じ時期の3年間におけるロシアの犯罪率にかんするロシア内務省の報告書を見ると、すべての重大犯罪・特別な重大犯罪のおよそ半分は下手人が発覚している。殺人と殺人未遂については、発覚率は80パーセントに達する。これは非常によい数字である。

さて、これと最高検察庁が発表している、2004～2006年の期間におけるジャーナリストにたいするあきらかにジャーナリストとしての職業活動に関連した重大犯罪は90あり、そのうち公判に付せられたものはわずか11にとどまる（のこりは捜査が完了していないか、完了したが公訴にいたらなかったか、捜査過程そのものが開始されなかったか、となっている）。公判にもちこまれた11件のうち、判決まで到達したものの、つまり捜査員がまともな仕事をし下手人がつきとめられて判決が下りたもの、は1件にすぎない。ということは、発覚率はわずか9パーセントにすぎないわけであり、ロシアの平均よりはずっと低いことになる。

ところが、重大犯罪に限定しないでジャーナリストにたいするすべての犯罪をみてみると、発覚したもの（容疑者がみつきり公判をへて犯人が確定したもの）は5件にとどまり、発覚率はわずか2パーセントにすぎないのであり、全体の半数以上にあたる121件の捜査結果はいまだに公表すらされていないのである。

これらの数字は、メディアに働くものにたいする犯罪が全然捜査されないか、捜査されてもロシア全国の平均的なレベルよりはずっと貧弱な捜査しか行われていないこと、を如実に物語っている。

わが国の「腕力機関」は、実効のあがる仕事には欠くことのできない人員・予算・設備・職業意識・教育・良心等々を欠いている。ジャーナリストにたいする重大犯罪は注文をうけて行われる犯罪であり、捜査は例外なく難渋するものである。ロシアの法執行機関の人びとにたいしては、かれらの無慚な仕事ぶりにたいする報酬——感情的になって申し訳ないが——

わたしたちの同僚の血と生命によって支払われていないのであれば、同情に値する点がないではない。だが、かれらの仕事ぶりの結果として、記者たちは誠実にみずからの職務を遂行することにますます腰が引けるようになってきている。こうして、自分の職業上の義務を実行するだけでもほとんど英雄的行為とみられるようなシステムが作り出されている現状である。

ジャーナリスト側の責任は？

わたしは、ジャーナリストにたいするいまひとつ別の種類の暴力が存在することにもふれないでおくわけにはいかない。この組織的な、政府が仕組んだ暴力は最近ロシアの4都市でおきた一連の「異論派の行進」[チェスの名手でもあるユーレイ・カスパロフが中心となり、草の根から幅広い民主化運動を組織しようとしている]をきっかけにして発生したものである。これらの行進が行われたさい——より正確にいうと、これらの行進が蹴散らされたさい——多数の記者が拘留されたり殴打されたりした。政府は保安関係者が果敢な行動をとったと賞賛し、不法行為をうけた大多数のジャーナリストは公務執行を妨害したとして罰金刑をうけた。そのなかには外国の新聞やTV会社の記者もいた。かれらのうち、不法行為のかどで警察を告訴した記者は1人だけだった。のこりのジャーナリストたちはどんなかたちにせよ抗議の告発をしなかった。かれらは、ロシアではほとんどのロシア人とおなじ流儀で生活していくことに慣れてきたにちがいない。

以上のべたところから、若干の明快な結論が引き出せる。

ジャーナリストはみずからの権利を守るために、より一貫した態度をとる必要がある。ジャーナリストの生命や身体の安全を侵害したものにたいして法的行動をとったジャーナリストは、いままでのところわずかしかない。

この点では、わたしたちジャーナリストにも全体としていささか共同の責任がある。それというのも、何人かの同僚が殴打されたとき、ジャーナ

リストのなかにはこれに皮肉な、あるいはあからさまに軽蔑するようなコメントをくわえたものがあるからである。

アンナ・ポリトコフスカヤ記者の死について、一部ロシアの活字メディアの報道は腹立たしいほど下品かつ冷ややかだった。わが国のそこの世界では彼女の死を悼む追悼集会がひらかれジャーナリストを顕彰する権威のある賞がおくられているというのに、ロシアの一部の新聞は、もしそうでなかったらもっと徹底的に、もっといためつけられて殺されただろう、といわんばかりに、彼女は米国の市民権をもっていた、と悪意にみちたひそひそ声でささやいた。

抗議集会や抗議行動の組織に参加したかどでジャーナリストを殴打したり告発したりすることを許してはならない。このような慣行には断乎として終止符を打たねばならない。そもそも、ジャーナリストが抗議行動をする人びとに共感しているかどうかは、断じて法廷で点検すべき問題ではない。

メディアで働くものにたいする殺人をはじめとする重大な犯罪については、下手人を特定するだけでは不十分である。それらの犯罪を注文した人間をあらゆる手をつかってつきとめなければならない。そのことを抜きにして行われるものは、とび切り公正にみえる証言といえども、国際社会はうけ入れてはならない。

抗議の手紙を書くのは徒労である。答えなしに放置されるからだ。プーチン大統領〔'10現在は首相〕とかれのひきいる政府は市民の訴えには耳をかさない。戦略を見直して、まず第一に各国政府と国際的な公共組織とをつうじて行動をはじめること、おそらくそうすべき時期にきているのである。〔Ⅱ〕は「第6回 日口学術・報道者会議報告書」より。〔 〕による注記と小見出しは訳者。—2009年12月20日）

〔注〕

- (1) VIII съезд Союза Журналистов России «Аналитический доклад — поле российской журналистики в начале 21 века» (Москва, 2008 г.)